

# 生活の表出と関係性からみた戸建て住宅地における

## オープン外構の実態と有効性に関する研究

建築計画分野

田中 宏幸

### Abstract

本稿は、塀や柵のない住宅（以後オープン外構と呼称）における外に対して開かれた接道側の庭（以後前庭と呼称）をどのように捉え、実際に使いこなしているかについて主に住まい手の視点からその実態を明らかにする事を目的としている。これまでのオープン外構についての既往研究は領域形成に主眼を置いたものが主であり、住民目線のものは見受けられない。本稿では住宅メーカーへのヒアリング調査を元にオープン外構の成立の経緯と計画手法を明らかにした上で、オープン外構の住宅地に住む住人へのアンケート結果を元に分析を行った結果、外に対して飾られた庭からの自然発生的なコミュニティのきっかけとしてのオープン外構の有効性が明らかとなった。これは今後の戸建て住宅地における近隣関係のあり方を論じる上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

### 1. 研究の背景と目的

かつて碁盤の目のように整然と並んだ住宅はその狭い敷地を確保するかのようには塀で囲われていた。ところが近年ではこれまでとは打って変わってそれまでの堅牢な塀どころか柵さえない住宅（以降オープン外構と呼称）が急増している。これまで塀に守られていた人々の住生活が一転して外からの視線にさらされることになったのだ。従来の塀で囲まれた庭は私的な鑑賞空間であった。その庭が外に対して開かれた状態に置かれ、近隣住民を含む不特定多数に見られるようになった段階で、その在り様は家の外に対する“生活の表出”と違って相違はない。

本稿では、オープン外構の住宅が戸建住宅の主流として大量に供給されていることから多くの住まい手が否応なしにオープン外構の住宅を選択している側面があると考え、外に対して開かれた前庭についてどのように捉え、実際に使いこなしているかについて主に住まい手の視点から評価を元に分析を行う。それによってオープン外構がその開かれた前庭を通じて住宅地の近隣関係のあり方にどのような影響を及ぼしているかについて明らかにすることを目的としている。

### 2. 研究の位置付け

オープン外構が一般的な住宅のスタイルとして日本に登場して20年余り。しかしオープン外構の住宅を扱った研究はまだ数が少なく、その内容も領域形成に主眼をおいたものが主である。特に住人の日常生活を主眼に置いてオープン外構を評価する視点のものは見られない。

本研究では、登場から20年という時間の経過した今だからこそ、黎明期に計画された住宅地から街開きからまだ数年の最新の住宅地までを調査し、その維持管理や近隣関係、生活の変化などを様々な視点に立ってオープン外構の有効性についての検証を行う。

### 3. オープン外構の定義

オープン外構という言葉はエクステリア、住宅業界で使用されているが、その明確な定義についてはっきりとした定義はない。一般的な外構のスタイルは以下の3つの分類であり、本稿もこの分類に従う。

本稿では単一の住宅としてだけではなく住宅地としての配置計画や近隣関係にも着目するため、塀や柵がない「オープン外構」の住宅が集まった住宅地を対象として扱うが、その中には入居後に住人によって柵が設けられた住宅も存在する。これらの住宅は厳密には「オープン外構」に分類されないが、ある意味でそれも住民の住みこなしの一つの形であり、本研究の目的でも述べた「開かれた外構をどのように住みこなしているか」という視点に立ち、柵についても軽微なものであればオープン外構の範疇として対象としている。



図1 一般的な外構のスタイル

#### 4. オープン外構の成立と計画手法

住宅メーカー3社に対するヒアリング調査を行い、その結果として、オープン外構の成立の経緯と計画手法を明らかとした。

##### 4.1 オープン外構の成立の経緯

オープン外構の住宅が現れ始めたのは90年代初めから半ばであり、その先駆けとしてワシントン村(1991年竣工)などの海外住宅地をモデルにした住宅地が次々と計画された。しかし、それらの住宅地は一体的な街並みを提案することの意義を投げかけたものに過ぎない。オープン外構の流行の直接の影響はガーデニングの流行と外構コストの削減が合致した結果である。その背景にはバブル崩壊という世の中の大きな変化があり、煌びやかな生活からスローな生活へと価値観が変化することに伴い、ガーデニングのようなお金の掛からない娯楽が流行したといえる。その結果、現在の日本のオープン外構は常に隣人の気配を感じるような狭い敷地の中でガーデニングを通じて周囲との関係をつくり出す結果としてワシントン村のような海外型の住宅とはまったく違う“日本的なオープン外構の形”といえる。その近隣関係のあり方はどちらかと言えば昔の長屋住まいのようだともいえる。

オープン外構が近年急増している背景としてデフレ化による住宅の敷地面積の縮小や、車の複数台保有などの理由が挙げられる。加えてオープン外構住宅の購入層である若い世代(2、30代、もしくは40代)にとって塀はそれほど重要でないという認識を徐々に持ち始めており、そういった意味では新しい価値観を持った世代が増えてきていることも大きな要因と言える。

##### 4.2 計画手法

###### 住宅地の計画手法

一体的な住宅地デザインによって他との差別化、個性化を図り、住宅地としての一体感を生み出し住宅地としての価値を高めると共に、外に対して閉鎖的な雰囲気を作り出し、その反面内部での住人同士の結びつきは発生しやすい環境をつくりだす。

###### コミュニティの形成

供給者側がその後の入居者を増やす目的で、住まい手に対してコミュニティのきっかけとなるイベント、企画を行う。→コミュニティが宣伝になる。

###### 住戸の計画

外から見える部分での開口部の設置を避けるなど、外構がオープンな分、住戸そのものを閉鎖的にすることでプライバシーを守る。

###### 外構計画

オープン外構になっても庭の南面配置は変わらず、その結果としてアクセスが南入り以外の住戸では南面のプライベートガーデンと接道側のフロントガーデン

(前庭)という2つの性格の違う庭が生まれ、外構計画のバリエーションを多様なものにした。

#### 5. 住人に対するアンケート調査について

##### 5.1 調査の概要

オープン外構の住宅の居住実態を明らかにするために住宅地7ヶ所、合計614世帯に対してアンケート調査を行った。配布状況に関しては全住戸614世帯に対して、配布数が480、そのうち回収できたのが257であった。(回収率：41.9%)

##### 5.2 対象地の選定理由

オープン外構の住宅地は多種多様であるが、一般的によく見られるタイプというのは存在する。しかし、本稿においては対象地の選定理由として条件による違いに着目することでオープン外構の特性を見出すという観点から特徴的な事例を選定した。

その結果、対象地を分類すると以下のようになった。

洋風住宅地：住宅地A、住宅地C
広大な新興住宅地：住宅地D
日本的オープン外構の住宅地：住宅地B、住宅地E、住宅地F、住宅地G

表1 ヒアリング調査の概要

対象者	住宅メーカーA	住宅メーカーB	住宅メーカーC
会社名	ヤマト住建	大和ハウス工業	三井ホーム
実施場所	ヤマト住建本社	大和ハウス工業本社	三井ホーム本社
所在地	兵庫県神戸市	大阪府大阪市	東京都新宿区
実施日	2011年10月25日	2011年10月31日	2011年11月15日
実施時間	45分	1時間	1時間

表2 アンケート調査の概要

住宅地名	住宅地A	住宅地B	住宅地C	住宅地D	住宅地E	住宅地F	住宅地G
西神SVインテッジ	狭間が丘ハーモニータウン	ワシントン村	カルチャータウン学園8丁目	プレミアムコンフォート北野田	ヴェルデ・G・コラル和泉中央	グローバルコート庭代台	
所在地	兵庫県神戸市	兵庫県三田市	兵庫県三田市	兵庫県三田市	大阪府堺市	大阪府和泉市	大阪府堺市
住戸数	26戸	26戸	106戸	78戸	120戸	128戸	130戸
竣工時期	1989年	1990年代半ば	1991年	2003年	2006年	2005年	1998年
平均居住年数	17.9年	11.6年	10.7年	3.5年	4.3年	6.1年	9.9年
平均敷地面積	235.76㎡	193.38㎡	461.46㎡	341.67㎡	160.59㎡	115.03㎡	180.50㎡

表3 アンケート調査の回収状況

住宅地名	住宅地A	住宅地B	住宅地C	住宅地D	住宅地E	住宅地F	住宅地G
全住戸数	26	26	106	78	120	128	130
配布数	23	19	79	56	108	121	110
回収数	16	10	42	34	38	43	74
回収率	61.5%	38.5%	39.6%	43.8%	31.7%	33.6%	56.9%

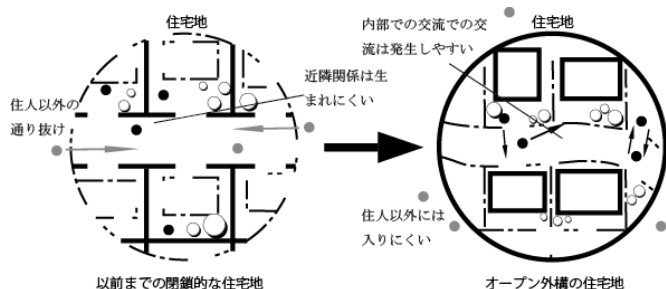


図2 オープン外構の住宅地の特性

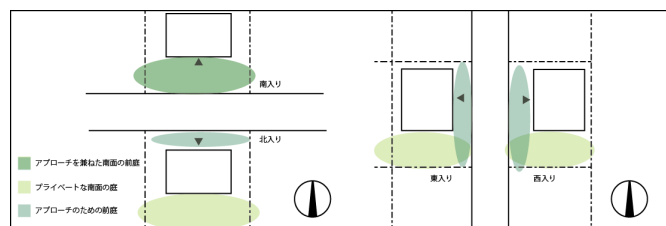


図3 接道方向と庭の性格との関係

## 6. オープン外構における前庭の使われ方

### 6.1 前庭のしつらえ

#### 植栽

鉢植え(54%)、花壇(49%)はどの住宅地でも多く見られ、敷地が狭い住宅地E、Fでも花壇がある家(41%、42%)は多く見られた。

#### 前庭に置かれている物

デッキ(32%)やイス(23%)、テーブル(22%)のようなその場で時間を過ごすためのものが多いが、最も狭い住宅地Fではほとんど見られなかった。また置物(39%)に関してはどの住宅地でも高い割合を示していた。

#### 前庭に置いてある装飾品

行事に関する物(46%)がほとんどでその内容もクリスマスを挙げる家がほとんどであった。特にない(37%)という家も多い。庭のしつらえは多くの家にとってガーデニングの範囲で行われていることがわかった。

### 6.2 前庭の用途

#### 視線の影響

多くの回答者が外からの視線を意識しながら庭を使っていることがわかった。(図4) 気を使いながらも目的は果たしているが(図6)、やはり“外”であるという意識が強く、飲食やくつろぎといった外では抵抗を感じる行為はオープン外構の庭ではしにくいことがわかった。

#### 庭のしつらえ方

前庭の飾り方の程度を5段階評価で質問したところ、飾っていると回答したのが全体の35%であり、飾っていないと回答したのが52%であるのに対してやや低い割合を示している。(図7)

視線の有無と、飾り方の関係をみたところ、「非常に見られる」、「ある程度見られる」の回答者がそれ以外に対して、装飾への意識が高くなっており、外からの視線の有無が装飾への意識に深く影響しているといえる。(図8)

#### 庭の使い方

基本的には草花の世話や駐輪などだが、敷地面積が大きくなると飲食や休憩などに使われる割合が増える。

(図10) 外からの視線が庭での活動に影響していない住人と、外に出ることを促進していると感じている住人に二分されることが明らかになり、後者は庭を飾ることに積極的であることがわかった。(図11)

### 6.3 庭の維持管理

#### 掃除の頻度

前庭の掃除は必要になったら行う(44%)程度であり、前面道路の掃除(26%)もその範囲に入っている。手入れ維持を行う動機としては家族や自分のため(73%)という回答が目立った。

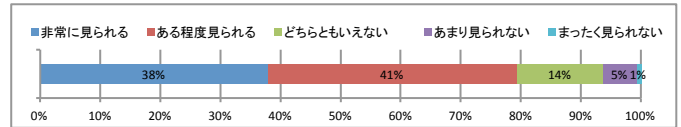


図4 自分の庭のしつらえを外から見られるか n=256

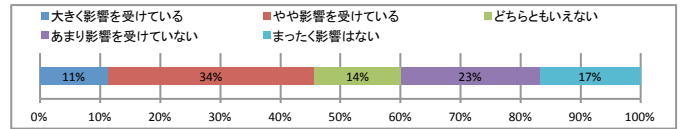


図5 庭を使う上で外からの視線の影響を受けるか n=256

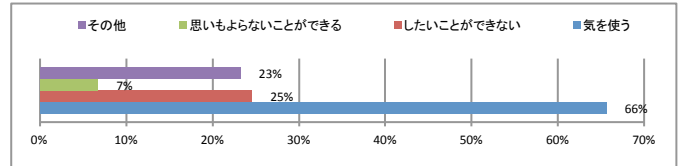


図6 外からの視線によってどんな影響を受けているか n=151

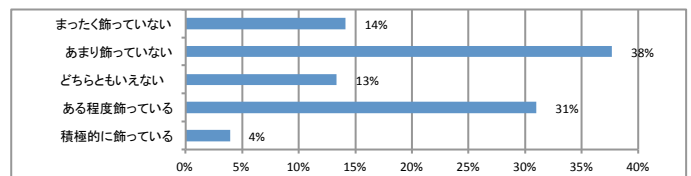


図7 どのくらい飾っているのか n=255

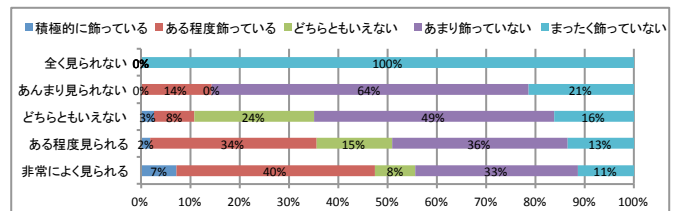


図8 外からの目線の有無からみた飾りの程度

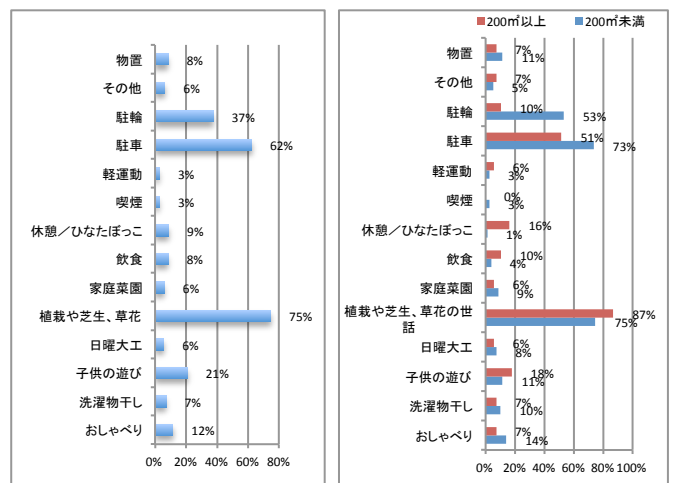


図9 前庭の用途 n=251

図10 敷地面積からみた前庭の用途

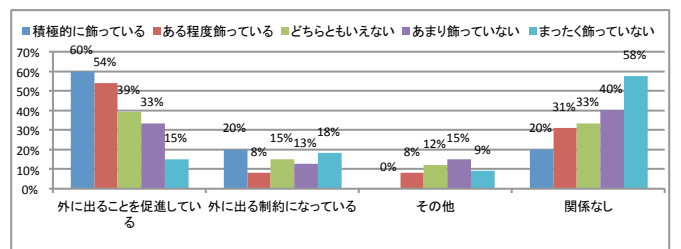


図11 外からの視線の有無からみた飾りの程度 n=255

## 6.4 時間的変遷

### 視線に対する考えの変化

外からの視線に対する意識がどのように変化したかという質問に対して、「人目を気にしていたが、そのうち気にならなくなった」(25%)、「今も昔も視線を感じない」(30%)が多く、最初から気にしていない場合と、そうでない場合でも時間が経過するにつれて気にしなくなったという人が多いことがわかった。

装飾への意識との関係(図12)を見ると、最初から気にしない、もしくはそのうち気にならなくなった場合、装飾への積極性は低いという結果を得たが、大きな違いは見られなかった。

### しつらえ方に対する考えの変化

しつらえ方には時間的変化がないと回答したのが大半(72%)だが、変化した(25%)という結果だった。

### 庭の手入れの変化

ずっと変わらず手入れをしている住民は多い(45%)が、高齢化や多忙化によって手入れを続けられなくなる住民も多く存在する。その一方で最初は意欲的でなかったが、次第に取り組むようになったという意見も数多く見られた。(表4)

## 6.5 近隣関係

### 人付き合いの程度

近所付き合いの程度は親しい人だと一緒に外出をしたり(38%)、おすそ分け(58%)や家に招く(43%)ような親しい付き合いをしている。それ以外の人では挨拶(56%)や立ち話(65%)程度の付き合いを行なっていることがわかった。

### 前庭に関連した人付き合い

庭づくりに関する話題や情報交換といった立ち話の延長のような付き合いであった。(図13)

### 行事ごとの飾り付け

クリスマスに関連した飾り付けやイルミネーションを行う(33%)という回答は多く見られたが、子供の成長に合わせてやらなくなった家も多く(表5)、これらの行事に対する取り組みは子供の有無に大きく左右されることがわかった。(図14)

## 7. オープン外構住宅での生活実態

### 7.1 オープン外構住宅の内部での生活

アンケートの結果よりオープン外構住宅の居住者は視線や音、立ち入りやすさについていずれも6割以上が意識しながらも、高い居心地の良さ(81%)、落ち着きやすさ(68%)を感じていることがわかった。防犯性に関しては肯定的な立場(27%)と否定的な立場(22%)に分かれ、それ以上にどちらともいえないという意見(51%)が多く、隠れる死角がないというオープン外構の防犯上のメリットにも賛否両論があることがわかった。

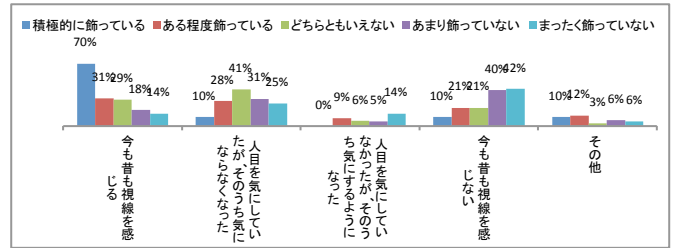


図12 視線に対する考えの変化と装飾への意識の関係 n=253

表4 庭の手入れの変化の具体的内容

後向きな変化
[1] 夫婦の老齢のため(主に芝生の手入れ)
[2] ボランティア活動で忙しく、家の中の掃除だけでも大変で外までしている余裕はない。膨大な時間がない。その時間があれば読書をした。
[3] 体力的なもの
[4] 入居して長くなると美しく維持する気持ちが薄れるから。加齢のため。
[5] 花物症がひどくなったので
[6] 年を取ってきたので体力的にしんどい
[7] 子育てが今は忙しい
[8] やや関心が薄れた。芝生が安定した。
[9] 仕事を持ったので時間が取れなくなった
[10] 年を経て、体力的にきつくなってきたのでまめに植え替えるの必要な植物を減らし、成長の遅い種類に替えている。
[11] 80歳を過ぎてからは疲れやすい。
[12] 飽きてきた。(私の中でブームが去った。)
[13] 元々興味のあることではなかったのと、お金がかかるため。
[14] 忙しい、季節柄(暑い、寒い等)
[15] 入居時は家を共にきれいに!と思っていたが、何かと忙しく「ま、いっか」になってきたため
前向きな変化
[24] 退職前までは近隣に迷惑をかけない様、芝管理を業者に依頼。退職後はそれに加えて自らガーデニングを行うようにしている。
[25] 近隣との同じエリアに住む住人としての連帯意識の向上
[26] やはり自分が散歩していて、庭のきれいきに心が和むときがあり、その経験からウチもなるべく庭をきれいにしようと思った。少なくとも不愉快にさせないように心掛けようと思っている。
[27] 孫の世話をしていただけで、成長するにつれて暇ができたので、
[28] 入居後、まめに雑草取りをしていたので、雑草が減ったため。
[29] 今まで庭に興味はなかったが土いじりが楽しい
[30] 未っ子が幼稚園に行き、時間が出来たので。
[31] 2-3年前は変えたり、試したりが多かったが、庭に合う草花や手入れの時期がわかってきて現在は必要な時になっている。
[32] 木などが根付いているので水やりの頻度は減った。
[33] はじめはフルタイムで働いて時間がなかったが、仕事を辞めてガーデニングに興味を持ち始めてから手入れをこまめにするようになった。
[34] 最近花壇を作ってから、お金をかけた事もあり、気になるようになった。常にキレイにしておきたい。
[35] 草取りをするのが面倒だったがタイルにして掃き掃除が簡単なのでまめにするようになった。
[36] 通行する人達が庭をほめてくださるのできちんとしないと気になる。
[37] 先に植えた樹木や宿根草が育ってきたので、季節毎の植え替え等が少なくなった。手がかららない種類の植物を選ぶようになった。子供が小さかった時の方が、選ばせながら手入れもしやすかった。
[38] 季節の草花を楽しむようになった。

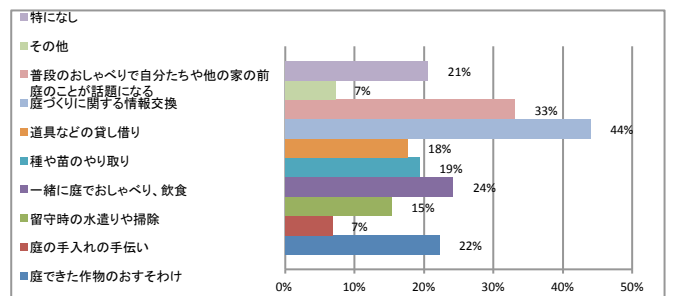


図13 前庭に関連した付き合いの内容 n=248

表5 住宅地での行事ごと

[1] 今年は何もできていないが、去年まで12月にクリスマスイルミネーションを半数以上の家でやっていた。
[2] 毎夏、村内でガーデンパーティーをしている。
[3] 子供が小さいときはハロウィンを楽しんでいました。
[4] 秋に定例のコンサートの開催(今年で7年連続している。)
[5] 街路に花の植栽をする(年2回)
[6] 一緒にするわけではないが、各自クリスマスの時期にライトアップする家は多い。
[7] 昨年まではクリスマスのイルミネーションをしていたが今年からはしていない。数年前まではハロウィンも行っていた。
[8] ハロウィンについては4.5年前までは各家ごとに飾って子供たちも仮装して回っていました。
[9] 周りにあわせてクリスマスの、ハロウィンの飾り付けをする。

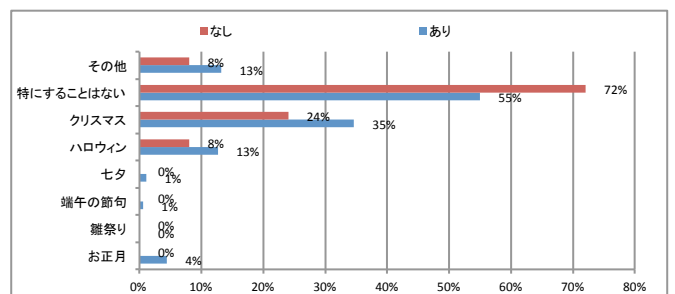


図14 未成年の子供の有無からみた行事ごとのしつらえ n=207

## 7.2 住宅内のしつらえ方

### しつらえ方に与える影響

外からの視線に対して部屋の中をなるべく整えるようにしている(53%)の方が、なるべく見られないようにしている(35%)場合よりも居心地、落ち着きやすさを感じていることがわかった(図15)。視線に対して神経質になりすぎるよりも前向きな気持ちで受け入れようとする姿勢でいる方が結果的に充足感を得られるということの表れであるといえる。

### 住宅内部での過ごし方に与える影響

内部での過ごし方への影響について過半数の回答者が影響はない(59%)と答え、影響を受けている(23%)と回答した場合でもその過半数(59%)が何かと気を使いつつも生活に支障が出るほどではないことがわかった。家の前の通りとの関係

家の中から見知らぬ人物をチェックしたり(20%)、近所の子供に気を配ったり(16%)、街全体で安全に目を光らせている様子がわかったが、家の中から外部が見えないなど外構が開放的な反面、住宅自体は閉鎖的になっていると感じさせる意見も多数見られた。また、反対に回答者が近所の家の前を通る時には庭までは見ても(55%)、内部は見ないようにする(20%)など、近隣同士で外部からの不審者に目を配り、お互いの内部には必要以上に踏み込まないようにする住人同士の気遣いが感じられた。このような気遣いによって塀や柵のない住宅での生活が成立しているといえる。

### 接道側の窓の遮蔽状況

接道側の窓の遮蔽状況の変化を昼、夜、就寝時のそれぞれで見てみたところ、図16のようになった。

夜になると電灯の光でシルエットが丸見えになることを懸念する意見もあり(表6)、多くの家が厚手のカーテンを閉じた状況になる。また、一階の雨戸による遮蔽の割合は29%と高く、就寝時に雨戸を閉める人のほとんどは夜になった段階で雨戸を閉めている。これについて夜間はオープン外構の防犯上のメリットである視認性が下がるためか、接地階である一階の雨戸を閉めることで防犯性を高めていると考えられる。

## 8. オープン外構に対する住人の評価

### ハード面について

面積は小さくても、広く感じる住宅地E(図17)は前面道路との連続性が高いため、道路幅の広さや見通しの良さが前庭を広く感じさせていると考えられる。(図18、20)住宅地のデザインが居住者の評価に反映された例といえる。

### 庭づくりに関する評価

庭づくりでは人から見られることがやりに繋がるので熱心に取り組むようになったという意見が29%。加えて21%が周囲の影響を受けて庭づくりを始めた

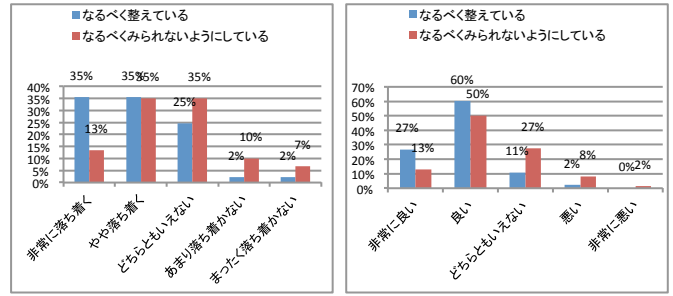


図15 住宅内部のしつらえ方と落ち着きやすさとの関係 n=120 (左)

住宅内部のしつらえ方と部屋の居心地との関係 n=124 (右)

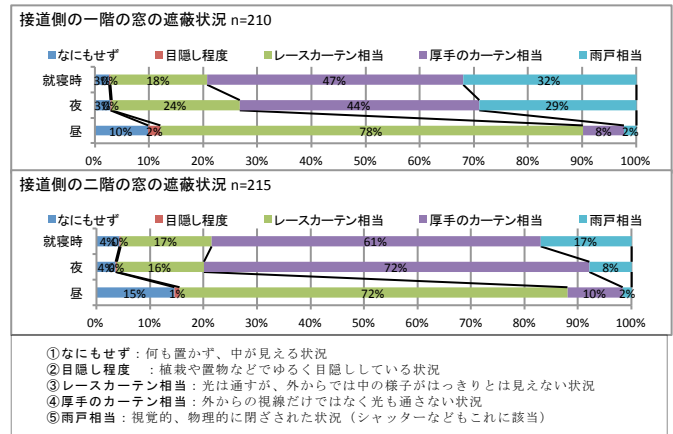


図16 接道側の窓の遮蔽状況

表6 住宅内部での生活に与える影響についての具体的な内容

- [1] お風呂上がり、すぐ服を着るようになった。
  - [2] はっきりと意識はしていないが、影響がある気がする。
  - [3] 音楽などの音が大きくなりすぎないようにする。
  - [4] 通りに人が居るときは大声を出さないように気をつけている。
  - [5] 夏などは服装に気をつけるなど
  - [6] 中に居る事が分かりやすく、セールスや宗教関係の人によくチャイムを2度押しされる。手が離せないときでも、ただちにインターフォンで対応しなければならない。
  - [7] ドアを開けていると家の中が見えるので通りがかりの人が見ていく。
- 遮蔽状況に関して
- [8] 照明を点けた時、部屋の中が丸見えになるのでカーテンを閉める
  - [9] 夜、電気を点けると丸見えなので、必ずカーテンを閉めている。
  - [10] カーテンを閉めて慣れました。最初は外から見えるんじゃないかと落ち着かなかった。
  - [11] 必ずカーテンをしている。
  - [12] カーテンを外から見えないミラーカーテンにしている。
  - [13] 和室の障子を開けると部屋の真ん中が見えるのでいつも閉めている。
  - [14] 白いスクリーンなので、居留守には使えない。
  - [15] カーテンを開けていると外からよく見えるので、裸などではウロロロできません。
  - [16] 戸締まりには特に注意するようになった。
  - [17] 夏の夜、掃き出し窓を開けていると、1人では怖い。

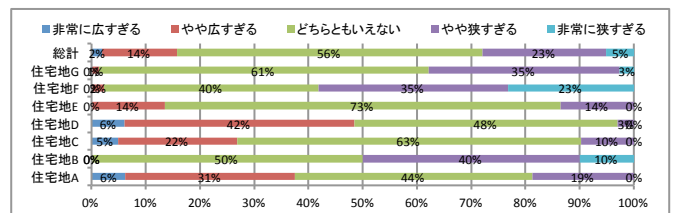


図17 前庭の広さに対する評価 n=254



図18 住宅地Eの様子

↑敷地と前面道路との連続性が高く、道路が直線なので見通しが良い。

→住宅地Eの方が道路幅が広く、見通しが良いため広々とした印象を与える。

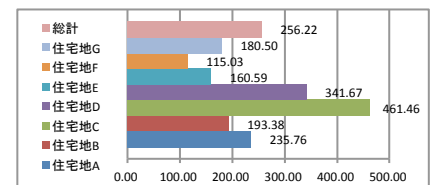


図19 平均敷地面積



図20 住宅地E(左)、F(右)の宅地内道路

という結果となり（図 21）、半数が庭づくりにおいてオープン外構の影響を受けていることがわかった。

### 開放性についての評価

アプローチが短く、目隠しもなくダイレクトに道路に接する住宅は近隣との視線の交錯も多くなり、開かれていると強く感じていることがわかった（図 22、23）。それもあって開放感を高めているという評価（74%）を得ている。それだけに窓の大きさについて、デザインのために設けられた大きな窓を活用している家もあれば、窓の大きさを気にする家もあり（図 24、25）、オープン外構においていかに開くかという部分には関しては慎重な検討が必要であるといえる。

### 近隣関係

過半数の回答者がオープン外構が他の家への立ち入りやすさや住民同士の付き合い、地域のまとまりに良い影響を与えていると評価している。道沿いの景観に与える影響についても高い評価（71%）を得た。また敷地面積に比例して、街並みの景観への寄与を評価する割合が高くなることが明らかとなり（図 26）、ある程度の広さがあると景観的要素を形作る余裕が生まれるのではないかと考えられる。

### 総合的な評価

オープン外構に対する総合評価は極めて高く（図 27）、敷地面積に比例してその評価が高くなることが示された。（図 28）また、住宅の内部生活に視線や音の影響が及ぶかどうかで評価が変わる傾向があることが明らかとなった。（図 29、30）

## 9. 結論

オープン外構の流行についてガーデニングとの関係を指摘したが、塀や柵のない庭をしつらえるという行為は大なり小なり外に対して見せたいという顕示的な意識が伴うものと考えられる。

本論において庭づくりへの積極性と外からの視線に於いて、外からの視線がある方が積極的に庭を飾ろうとする傾向があることが明らかとなった。また、オープン外構によって開かれた状態が他人の庭への立ち入りやすさや住民同士の付き合い、ひいては地域としてのまとまりに貢献しているという評価も得た。

これらのことから外に対して飾られた庭からの自然発生的なコミュニティのきっかけとしてのオープン外構の有効性が証明された。

オープン外構はその特性により、防犯性と開放性という一見反目し合う要素が両立している。この関係を維持していくためには外に対する閉鎖性を生み出す住宅地デザインや塀や柵がないというハード面だけでは難しい。それを機能させる健全な近隣関係の形成がオープン外構には不可欠であり、そのきっかけとして開かれた前庭は重要な役割を担っているといえる。

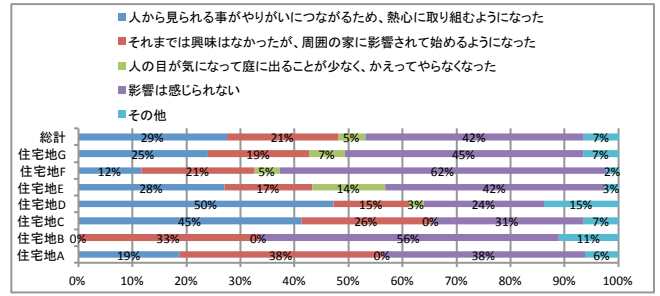


図 21 オープン外構であることが庭づくりに与える影響 n=252



図 22 住宅地 E (上)、F (下) のアプローチ

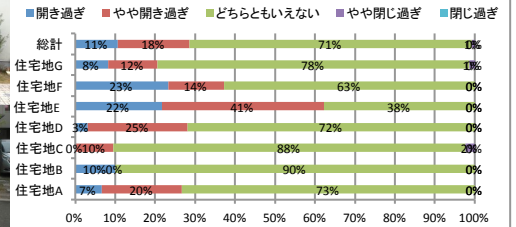


図 23 塀や柵のない開かれた状態に対する評価 n=252



図 24 住宅地 F の印象的な大きな窓

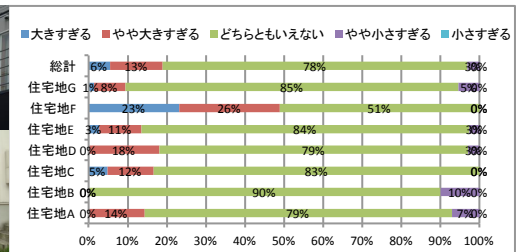


図 25 窓の大きさに対する評価 n=253

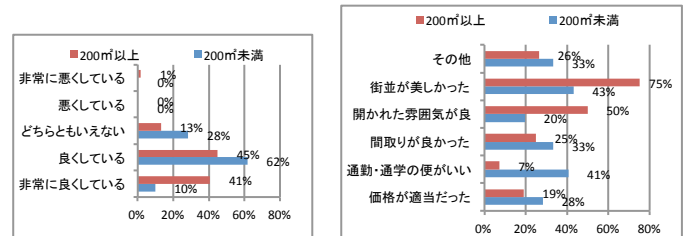


図 26 敷地面積から見た道沿いの景観に与える影響に対する評価 (左) 敷地面積から見た現在の住宅の取得理由 (右)

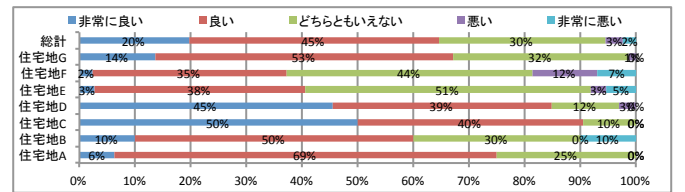


図 27 オープン外構に対する総合的な評価 n=254

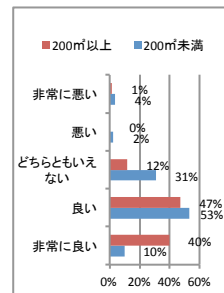


図 28 敷地面積からみたオープン外構に対する総合的な評価

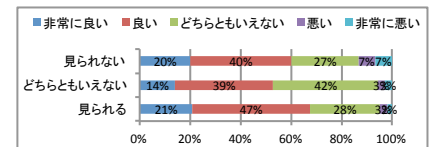


図 29 庭への視線の有無からみた、オープン外構に対する総合的な評価 n=254

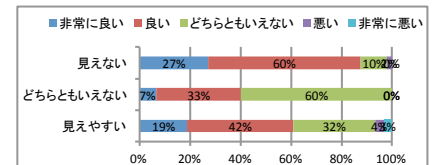


図 30 住宅内部への視線の有無からみた、オープン外構に対する総合的な評価 n=254

## 討 議 等

### ◆討議 [ 三谷先生 ]

庭のことを議論しているのはよくわかるが、それによって住まいの構えかた、プランとかその接点の部分は実際にどういうふうになっているのか。

◆回答:住宅の南面配置という原則は変わっておらず、外構がオープンな分住宅の閉鎖性もあって外との関係性を作りにくい。ただ、外へ出ようとする意識は強まっており、坪庭や中庭といったプライベートな庭を設け、そちらに対してリビングに面したデッキを設けるなどの提案はなされている。ただ、外から見える位置にデッキが設けられた場合では利用されている様子はなく、視線の影響は大きいといえる。

### ◆討議 [ 内田先生 ]

当初期待していたものと住み始めてから生活などがどういったふうになっていったか。それともう一つ、比較的オープンな環境を好む人が多く集まる中でそれでも住戸の閉鎖性は高く、メーカーも住戸そのものの閉鎖性は高めようとしているという話があったが住人の実際の生活との違いは？

◆回答:(一つ目の質問について) 購入者の多くは通勤の便利さなどのオープン外構であること以外の理由で購入している。加えて市場に出回っている殆どがオープン外構であるから購入している側面がある。

(二つめの質問について) 住戸の中を見られたくないという意見は非常に多い。総合的にはオープン外構を支持している人であっても内部は見られたくないという回答が殆どで、庭を積極的に飾っている人でも同様の回答だったことからその部分は触れられたく部分であるといえる。町家などの伝統的な日本人の昔の生活に比べると見られたくないと感じているが、最近の人はそれほど塀に委ねておらずそのへんは価値観が変わってきている。

### ◆討議 [ 倉方先生 ]

基本的につまらない。オープン外構を肯定するか否定するかどちらにせよ現状にぶら下がっただけでは研究とはいえない。新しくわかったことやオープン外構の可能性となるものは何かないのか。

◆回答:当初、選択肢がオープン外構しかないことか

ら選択しているという状況から否定的な意見が多いのではないかと予想していたが、実際には肯定的な意見が多くを占めた。このことから現在の住宅購入層の20、30代の価値観が変化しているとは言える。日本のオープン外構の話があったが、それまで閉鎖化していたのが最近になって町家のような近隣関係が見直されているといえ、オープン外構の住宅が流行することで近隣関係のあり方などの価値観が変わってゆくものと考えられる。

### ◆討議 [ 三谷先生 ]

前庭はオープンになってもプランはちっとも変わっていない。その現状に対してあなたなりの提案を反映しなければ研究を論じて意味がない。